

## キラキラネームの定義と表記

## —過去の「現代用語の基礎知識」の検討—

荻原 祐二 (東京理科大学 教養教育研究院, yogihara@rs.tus.ac.jp)

## The definitions and notations of kirakira names:

## Examining older editions of the “Encyclopedia of Contemporary Words”

Yuji Ogihara (Institute of Arts and Sciences, Tokyo University of Science, Japan)

## 要約

本論文は、これまで検討されていなかった過去の「現代用語の基礎知識」を遡り、キラキラネームについての説明を検証することで、キラキラネームの定義と表記の更なる検討を行った。まず、現代用語の基礎知識における定義は、これまで整理されてきた定義における広義である「頻度が低い名前」に加えて、狭義を構成する「伝統から逸脱した名前」と「読むことが難しい名前」の要素は備えていたが、「肯定的または中立的な文脈で用いられる名前」という要素は備えていなかった。そして、現代用語の基礎知識では、「キラキラネーム」と表記されており、他の多くの辞典・事典と主要な全国紙、学術文献における表記と一致していた。全体として、これまで整理されてきた定義や表記と一致しており、これまでの知見が妥当なものであることを確認すると同時に、これまでの知見に大きな修正・加筆を行う必要性は低いことを示した点で意義がある。また、本論文は、キラキラネームがいつ、代表的な現代用語事典に取り上げられるようになったのかに関する情報を提供した点でも意義がある。現代用語の基礎知識において初めて言及されたのは、2012年11月発売の現代用語の基礎知識2013であり、この掲載をもとに、2012年の新語・流行語大賞にもノミネートされていた。よって、2012年の段階で、キラキラネームという言葉は、日本社会の中で広く一般的に使用され始めていたことを示していた。

## Abstract

This article examined the definitions and notations of kirakira names by exploring explanations of kirakira names in the past edition of the “Encyclopedia of Contemporary Words,” which had been uninvestigated in previous research. First, the definition in the “Encyclopedia of Contemporary Words” contained the component of “low-frequency names,” which is used to broadly define kirakira names. In addition, it contained the components of “names that deviate from traditions” and “names that are difficult to read,” both of which are used to narrowly define kirakira names. Nevertheless, it did not contain the component of “names that are used in positive or neutral contexts.” Second, the term was written as “kirakira name (both in katakana)” in the “Encyclopedia of Contemporary Words,” which is consistent with the notation in many other representative dictionaries and encyclopedias, major national newspapers, and academic literature. Overall, the definition and notation in the “Encyclopedia of Contemporary Words” were consistent with those in previous research, further confirming the validity of the prior findings and indicating that the necessity of modifying the prior understandings is low. Moreover, this article provides valuable information about when kirakira names began to be featured and explained in a representative encyclopedia. The first time when kirakira name was explained in the “Encyclopedia of Contemporary Words” was in the 2013 edition, published in November 2012. Based on this publication, the word “kirakira name” was nominated for the “New Words and Vogue Words Grand Prix for 2012.” Thus, it shows that, as of 2012, the word kirakira name began to be used widely and commonly in Japanese society.

## キーワード

キラキラネーム, 定義, 表記, 現代用語の基礎知識, 名前

## 1. はじめに

キラキラネームとは、広義では「頻度が低い名前」を意味し、狭義では「頻度が低い名前」に加えて「伝統から逸脱した名前」や「読むことが難しい名前」(荻原, 2015; 2022c; Ogihara, 2020; 2021b; 2021c; 2022b)、「肯定的または中立的な文脈で用いられる名前」といった要素を併せ持つ名前を意味する(荻原, 2022a)。例えば、「俗に、一般的・伝統的でない漢字の読み方や、人名には合わない単語を用いた、一風変わった名前」(大辞泉)や「通常の名付けの型にはまらない名前を俗に

いう語」(大辞林)と定義されている。近年の日本において、頻度の低い個性的な名前が増えているという複数の報告から(Ogihara, 2021a; 2022a; Ogihara et al., 2015; Ogihara and Ito, 2022)、この広義においては、キラキラネームが増加していると言える(荻原, 2022b)。

また、キラキラネームと類似もしくは同じ概念を示すものとして、「DQNネーム」がある(荻原, 2022a)。「DQN」(「どきゅん」と読む)とは、「非常識な行動や周囲の迷惑を顧みない行動をする者をいう俗語。主にインターネット上で用いられる蔑称」(大辞泉)や「頭が悪い人、非常識な人などをさすときに用いる語」(大辞林)とされており、そうした人々が与えた(与えるような)名前を意味する。例えば、「社会的に許容さ

れにくい日本の子どもの名のこと。いわゆる珍名であり、『キラキラネーム』とも呼ばれる」(知恵蔵mini)や「常識的な読み方から逸脱した珍奇な名前、奇を衒ったような難読名、などを侮蔑を込めて呼ぶ言い方」(実用日本語表現辞典)と定義されている。DQNネームは、キラキラネームと同一の概念として扱われることもあれば、キラキラネームと比べて否定的・侮蔑的なニュアンスが含まれ、使用される文脈が異なる点で区別されることもある(荻原, 2022a; 2023)。

### 1.1 「現代用語の基礎知識」とキラキラネーム

荻原(2022a)では、キラキラネームの定義を概観する際に、多くの辞典・事典を含めた国内最大級の包括的データベースであるJapan Knowledge Libを用いて、「現代用語の基礎知識」2019・2020・2021を対象に検索を行った。そして、この3年分の現代用語の基礎知識には、キラキラネームという言葉は掲載されていなかったため、詳細な検討の対象とはならなかった。<sup>(1)</sup>

しかし、キラキラネームという言葉、そしてその概念を理解する際に重要な出来事として、キラキラネームという言葉は、2012年の新語・流行語大賞<sup>(2)</sup>にノミネートされていた。<sup>(3)</sup>この新語・流行語大賞は、その年の現代用語の基礎知識に収録されたものから基本的に出選されている(自由国民社, 2023)。よって、2012年の新語・流行語大賞にノミネートされていたということは、当時の現代用語の基礎知識にも掲載されている可能性が高いということである。

そこで、既に検討された、現代用語の基礎知識2019・2020・2021に加えて、2000年から最新版である2022年版までの、全部で23年分の現代用語の基礎知識を検討した。その結果、2012年11月15日発売の、現代用語の基礎知識2013においてのみ、掲載が確認された。2013年以外の版では、キラキラネームという言葉は説明されていなかった。

### 1.2 過去の「現代用語の基礎知識」を検討する意義

「現代用語の基礎知識」(自由国民社)は、「イミダス」(集英社)と「知恵蔵」(朝日新聞社)と並んで、新しい言葉と概念を理解するのに効果的な、代表的な現代用語事典のひとつである。既に詳細に検討したイミダスと知恵蔵に加えて、現代用語の基礎知識による説明を更に検討することで、キラキラネームをより多角的・包括的に理解することができる。これまでの知見と一貫した説明がされていれば、これまでの知見を確認することとなり、より頑健な知見と捉えることができる。一方で、これまでの知見と一貫しない説明がされていれば、これまでの定義を修正したり、新たな説明を加えるべきかもしれない。特に、キラキラネームの定義と表記という基礎的な事項について、他の辞典・事典との共通点・相違点を整理しながら理解することが重要である。

### 1.3 本論文

そこで本論文は、2012年に掲載された現代用語の基礎知識2013(自由国民社, 2012)によるキラキラネームの説明を、定義と表記の2つの観点から検討する。その際、代表的な6つの辞典・事典を用いて行った先行研究(荻原, 2022a)との共

通点と相違点を整理しながら、検討を進める。

## 2. 掲載内容

キラキラネームは、現代用語の基礎知識2013(自由国民社, 2012)において、「新傾向を感じる日本語」の章の中で、以下のように説明されていた。

小沢新党の名前が「国民の生活が第一」になったことに関して、休業中の歌手・宇多田ヒカルが「キラキラネームだ」と批判的なコメントを自身のSNSに書いたと、2012年7月14日深夜にケータイのネットニュースで目にした。この「キラキラネーム」とは「当て字などを使った変わった名前」のことで、別名「DQN(ドキュン)ネーム」ともいう。そもそも、暴走族のような当て字や、漫画・アニメ・ゲームなど架空のキャラクターから取った当て字の名前のように読みにくい名前や、常識的に考えにくい名前のこと。親が思いを込めて付けた子どもの名前であるが、他人から読んでもらえないと、せつかくの思いが空回りすることもある。「キラキラネーム」という言葉は、そういうことに対する批判的なネーミングだ。名前を付けられた子ども本人にはまったく責任がないので、具体的な名前は批判しにくい。そこで、こうした傾向・風潮が批判されるにとどまるのだろう(もちろん、こういったネーミングを「親バカ」と批判するのは「余計なお世話だ」という反論もある)。今回の政党名「国民の生活が第一」は、そもそも小沢一郎自身が率いていた民主党のスローガンであり、それを党名にしてしまうところに、宇多田は違和感があったということだろう。

この説明を、定義と表記の2つの観点から、以下で詳細に検討する。

## 3. 定義

現代用語の基礎知識では、キラキラネームは「当て字などを使った変わった名前」、「そもそも、暴走族のような当て字や、漫画・アニメ・ゲームなど架空のキャラクターから取った当て字の名前のように読みにくい名前や、常識的に考えにくい名前」<sup>(4)</sup>と定義されていた。これまで検討されてきた他の辞典・事典における説明との共通点と相違点について、整理する(表1)。

### 3.1 定義の共通点

まず、この定義は、荻原(2022a)が整理した定義の内、広義である「頻度が低い名前」の要素を備えている。「変わった名前」と「常識的に考えにくい名前」は「頻度が低い名前」と理解できる。この点は、すでに検討された他の6つの辞典・事典と共通しており、キラキラネームの根本的・基本的な構成要素が、「頻度が低い名前」であることをより確証的に示していると言える。

そして、狭義を構成する「伝統から逸脱した名前」の要素も含んでいる。「常識的に考えにくい名前」は「伝統から逸脱した名前」と捉えられる。この点は、4つの辞典・事典(大辞林・大辞泉・知恵蔵mini・実用日本語表現辞典)と一致しているが、

表1：各媒体におけるキラキラネームの構成要素の有無

媒体	頻度が低い名前	伝統から逸脱した名前	読むことが難しい名前	肯定的または中立的な文脈で用いられる名前	キラキラネーム = DQNネーム
現代用語の基礎知識	○	○	○	—	○(同義)
実用日本語表現辞典	○	○	○	○(肯定的)	×(異義)
大辞泉	○	○	○	—	○(同義)
知恵蔵mini(「DQNネーム」)	○	○	—	—	○(同義)
大辞林	○	○	—	—	—(言及なし)
イミダス	○	—	○	—	—(言及なし)
ウィキペディア	○	—	—	○(中立的)	×(異義)

注：知恵蔵miniでは、「DQNネーム」と「キラキラネーム」を同義としているため、こちらに掲載した。現代用語の基礎知識以外の辞典・事典における定義や説明の詳細は、荻原(2022a)を参照。

この要素を含んでいなかったイミダスとウィキペディアとは異なっている。

さらに、狭義を構成する「読むことが難しい名前」の要素も備えている。「読みにくい名前」は「読むことが難しい名前」と理解できる。この点は、3つの辞典・事典(大辞泉・イミダス・実用日本語表現辞典)と一致しているが、この要素を含んでいなかった3つの辞典・事典(大辞林・知恵蔵mini・ウィキペディア)とは異なっている。

### 3.2 定義の相違点

一方で、「肯定的または中立的な文脈で用いられる名前」という、使用される文脈を説明する要素は含まれていなかった。キラキラネームに対するやや否定的な評価はされていた<sup>(5)</sup>が、これらの記述はあくまで、キラキラネームが世間でどのように評価されているかに関する説明であり、キラキラネームを規定する要素そのものではないと考えられるため、先行研究(荻原, 2022a)に従い、使用される文脈に関する構成要素とはみなさなかつた。この点は、キラキラネームの使用文脈に関する説明が行われていなかった大辞林・大辞泉・イミダス・知恵蔵miniと共通していた。しかし、肯定的な文脈で使用されると説明されていた実用日本語表現辞典と、中立的な文脈で使用されると説明されていたウィキペディアとは異なっていた。

また、現代用語の基礎知識による定義には、これまで検討された6つの辞典・事典では言及されていないが新たに検討すべきと考えられる構成要素は見られなかった。

### 3.3 定義のまとめ

したがって、現代用語の基礎知識における定義は、広義である「頻度が低い名前」に加えて、狭義を構成する「伝統から逸脱した名前」と「読むことが難しい名前」の3つの要素は備えているが、使用される文脈についての説明は見られなかったため、「肯定的または中立的な文脈で用いられる名前」という要素は含まれていなかったと理解することができる。

広義を構成する要素が含まれ、狭義を構成する要素3つの内2つが含まれていたことから、これまで整理してきた定義(荻原, 2022a)とおおよそ一致していたと言える。よって、これまでの定義の妥当性を高め、これまでの定義に修正・加筆を行う必要性は低いことを示している。

### 3.4 代表例

現代用語の基礎知識では、キラキラネームの代表例として、「当て字などを使った変わった名前」と「暴走族のような当て字や、漫画・アニメ・ゲームなど架空のキャラクターから取った当て字の名前」が挙げられていた。これは、当て字を用いた名前と、架空のキャラクターの名前という2つの例に該当する。既に検討された辞典・事典においても、6つの媒体の内4つで当て字を用いた名前が、2つの媒体で架空のキャラクターの名前が代表例として挙げられていた(表2; 荻原, 2022a)。他の代表例として、特別な読み方をする名前と外国人名が挙げられていたが、それらは現代用語の基礎知識では、示されていなかった。

表2：各媒体におけるキラキラネームの代表例

	当て字	キャラクター	外国人名	特別な読み
現代用語の基礎知識	○	○	—	—
ウィキペディア	○	○	○	—
イミダス	○	○	—	○
知恵蔵mini(「DQNネーム」)	○	—	○	—
大辞林	○	—	—	—
大辞泉	—	—	—	○
実用日本語表現辞典	—	—	—	—

注：現代用語の基礎知識以外の辞典・事典における代表例の詳細は、荻原(2022a)を参照。

### 3.5 DQN ネームとの関連

現代用語の基礎知識においては、キラキラネームは「別名『DQN（ドキュン）ネーム』ともいう」と説明されており、キラキラネームとDQNネームは同義の概念として扱われていた。

このことは、キラキラネームとDQNネームを同義の概念として説明している知恵蔵miniと大辞泉と一致している(表1; 荻原, 2022a)。一方で、両者を異なる概念として区別していた実用日本語表現辞典とウィキペディアとは異なっていた。イミダスと大辞林では、両者の関連についての説明は見られなかった。

読売新聞・朝日新聞・毎日新聞・日本経済新聞の全国紙では、「キラキラネーム」という言葉は多く用いられているが、「DQNネーム」という言葉は全く用いられていなかったことから、両者を異なる概念として捉えていると考えられる(荻原, 2023)。そのため、新聞における捉え方と現代用語の基礎知識における捉え方は異なっている可能性がある。

学術文献においては、「キラキラネーム」だけでなく、「DQNネーム」とその類似表記が、わずかではあるが使用されており、「キラキラネーム」と「DQNネーム」を概念的に区別しているかどうかは明確ではなかった(荻原, 2023)。

先行研究から、少なくとも現在の所、キラキラネームとDQNネームの関連については明確でない(荻原, 2022a; 2023)。現代用語の基礎知識による説明は、キラキラネームとDQNネームは同義の概念として捉えており、一部の辞典・事典と一致しているが、他の辞典・事典、新聞、学術文献とは一致していなかった。

## 4. 表記

### 4.1 キラキラネーム

現代用語の基礎知識では、「キラキラネーム」とカタカナで表記されていた。そして、「きらきらネーム」や「キラキラ名」(荻原, 2023)といった他の表記は説明の中で用いられていなかった。

このことは、多くの辞典・事典で「キラキラネーム」と表記されていることと一致している(表3; 荻原, 2022a)。同じ現代用語事典である、イミダスと知恵蔵miniに加えて、実用日本語表現辞典とウィキペディアでも、「キラキラネーム」とカタカナで表記されていた。「きらきらネーム」とひらがなも用

いていた大辞林・大辞泉とは異なっていた。

さらに、読売新聞・朝日新聞・毎日新聞・日本経済新聞の全国紙では、ほとんどの記事において「キラキラネーム」と表記されていたこととも一致している(荻原, 2023)。朝日新聞と毎日新聞でわずかに見られた、「きらきらネーム」や「キラキラ名」といった表記は用いられていなかった。

同様に、学術文献においても、ほぼすべての文献において「キラキラネーム」と表記されていたこととも一致している(荻原, 2023)。

### 4.2 DQN ネーム

現代用語の基礎知識では、「DQN（ドキュン）ネーム」と表記されていた。括弧内の「ドキュン」は「DQN」というアルファベットの読みとして補足されているものであるため、表記としては「DQNネーム」を採用していると言える。

これは、多くの辞典・事典で「DQNネーム」と表記されていることと一致している(荻原, 2022a)。同じ現代用語事典である、知恵蔵miniに加えて、実用日本語表現辞典とウィキペディアでも、「DQNネーム」と表記されていた。「どきゅんネーム」とひらがなも用いていた大辞泉とは異なっていた。大辞林とイミダスでは、「DQNネーム」とその類似表記は用いられていなかった。

さらに、学術文献においても、ほとんどの文献で「DQNネーム」と表記されていたことと一致している(荻原, 2023)。読売新聞・朝日新聞・毎日新聞・日本経済新聞の全国紙では、「DQNネーム」とその類似表記は一度も用いられていなかった(荻原, 2023)。

### 4.3 まとめ

現代用語の基礎知識では、これまで検討されてきた辞典・事典(荻原, 2022a)、新聞と学術文献(荻原, 2023)の多数派と一致する表記(「キラキラネーム」・「DQNネーム」)が用いられていたと言える。

## 5. まとめ

### 5.1 結果のまとめとその意義

本論文は、これまで検討されていなかった過去の「現代用語の基礎知識」を遡り、キラキラネームについての説明を検

表3：各媒体における表記

	現代用語の 基礎知識	実用日本語 表現辞典	ウィキペディア	イミダス	知恵蔵mini	大辞泉	大辞林
キラキラネーム	○	○	○	○	△ (DQNネーム)	—	—
きらきらネーム	—	—	—	—	—	○	○
DQNネーム	△ (キラキラネーム)	○	△ (キラキラネーム)	—	○	—	—
dqnネーム	—	—	—	—	—	—	—
ドキュンネーム	△ (キラキラネーム)	—	—	—	—	—	—
どきゅんネーム	—	—	—	—	—	○	—

注：○=見出し語として記載あり、△=見出し語としては記載がなかったが、括弧内の用語の説明として記載あり。現代用語の基礎知識以外の辞典・事典における表記の詳細は、荻原(2022a)を参照。

証することで、キラキラネームの定義と表記の更なる検討を行った。全体として、これまで整理されてきた定義（荻原, 2022a）や表記（荻原, 2022a; 2023）と一致しており、これまでの知見が妥当なものであることを確認すると同時に、これまでの知見に大きな修正・加筆を行う必要性は低いことを示した点で意義がある。

まず、現代用語の基礎知識では、キラキラネームは「当て字などを使った変わった名前」、「そもそもは、暴走族のような当て字や、漫画・アニメ・ゲームなど架空のキャラクターから取った当て字の名前のように読みにくい名前や、常識的に考えにくい名前」と定義されていた（自由国民社, 2012）。現代用語の基礎知識における定義は、これまで整理されてきた定義（荻原, 2022a）における広義である「頻度が低い名前」に加えて、狭義を構成する「伝統から逸脱した名前」と「読むことが難しい名前」の要素は備えていたが、「肯定的または中立的な文脈で用いられる名前」という要素は備えていなかった。また、キラキラネームの代表例として、他の辞典・事典と同様に、当て字を用いた名前と、架空のキャラクターの名前が挙げられていた。

現代用語の基礎知識では、キラキラネームは「別名『DQN（ドキュン）ネーム』ともいう」と説明されており、キラキラネームとDQNネームは同義の概念として扱われていた。キラキラネームとDQNネームの関係については、主要な辞典・事典においても大きくばらついており、キラキラネームとDQNネームを同義の概念として説明している知恵蔵miniと大辞泉と一致していたが、両者を異なる概念と捉えるその他の辞典・事典や主要な新聞とは異なっていた（荻原, 2022a; 2023）。

そして、現代用語の基礎知識では、「キラキラネーム」と「DQNネーム」と表記されていた。これは、他の多くの辞典・事典（荻原, 2022a）と主要な全国紙、学術文献（荻原, 2023）における表記と一致していた。

## 5.2 キラキラネームの歴史的経緯

また、本論文は、キラキラネームがいつ、代表的な現代用語事典に取り上げられるようになったのかに関する情報を提供した点でも意義がある。キラキラネームという言葉、そしてそれが表す概念を理解するためには、その言葉がどのように生まれ、社会の中でより広く用いられるようになったのかといった歴史的経緯を把握することも重要である。

現代用語の基礎知識において初めて言及されたのは、2012年11月15日発売の現代用語の基礎知識2013（自由国民社, 2012）であった。そして、この掲載をもとに、2012年の新語・流行語大賞にもノミネートされていた（自由国民社, 2023）。よって、2012年の段階で、キラキラネームという言葉は、日本社会の中で広く一般的に使用され始めていたことを示している。

## 5.3 限界点と今後の展望

本論文の限界点を3点述べる。第1に、本論文は過去に定められたキラキラネームの定義を網羅的に検討した訳ではない。本論文には含まれていない要素を想定している定義や、本論文で扱った定義とは矛盾するような定義もあり得るかも

しれない。本論文は、先行研究では扱われていなかったものの、概念について重要な情報を提供すると強く推測されたため、過去の現代用語の基礎知識における定義を検討した。今後も、有用と考えられる定義については必要に応じて追加的に検証し、キラキラネームの概念について検討し続けることが求められる。その際に、先行研究（荻原, 2022a; 2023）および本論文が貢献すると考えられる。

第2に、本論文では、過去に遡って、2012年における現代用語の基礎知識の説明を検討したが、その説明の経時的な変化については検討していない。これは、現代用語の基礎知識では、2012年に初めて言及され、その後2021年まで言及されていないためである。言葉の定義や意味は、時間と共に変化することがある。今後は、キラキラネーム概念の経時的変化についても検証することが重要である。

第3に、本論文は、キラキラネームの歴史的経緯に関する情報も提供しているが、その情報の妥当性や正確性が十分に担保されているとは言えない。「キラキラネーム」という言葉が生まれた歴史的経緯や、その言葉が一般化して社会でより広く用いられるようになった社会的・文化的背景といった時系列変化について、先行研究でも一部検討されている（e.g., 小林, 2009; ウンサーシュッツ, 2015）が、十分とは言えない。他の辞典・事典や新聞、学術文献など、様々な媒体においてキラキラネームという言葉がいつ頃から用いられ、一般化していったのかについても明らかにしていくことが、キラキラネームという概念やそれを用いる人々、そしてそれを受け入れてきた日本社会の理解に貢献するであろう。

## 注

(1) 荻原 (2022a) の目的は、研究実施時点における最新版の辞典・事典において、キラキラネームがどのように定義・説明されているかを検討することであった。一部の辞典・事典においてのみ、過去の版を含めて検討を行うと、調査手法の一貫性が失われてしまう。言葉の定義や説明は時間と共に変化することがあるため、時間という要因を交絡させないためにも、この一貫性が守られる必要がある。一部の辞典・事典において過去の版を含めて検討するのであれば、他のすべての辞典・事典においても、過去すべての版を網羅的に検討しなくてはいけなくなる。言うまでもなく、辞典・事典には非常に多くの種類が存在し、それぞれに膨大な過去の版が存在することを考えると、研究遂行において現実的ではない。また、多くの辞典・事典における定義を横断的に検討しようとする際に、同時に歴史的経緯や時系列変化といった縦断的な検討にまで手を広げることは、研究の目的を散逸させてしまう。したがって、歴史的経緯や時系列変化について検討する意義や必要性が生じた際に、新たに検討することが最善と判断した。

(2) ここでは、自由国民社による「ユーキャン新語・流行語大賞」を指す。

(3) この年の大賞は、「ワイルドだろお」であり、「iPS細胞（人工多能性幹細胞）」や「終活」、「爆弾低気圧」などがトップテンに選出されていた（自由国民社, 2023）。

(4) 「そもそもは」と説明されているということは、キラキラ

ネームが、「暴走族のような当て字や、漫画・アニメ・ゲームなど架空のキャラクターから取った当て字の名前のよう

に読みにくい名前」や「常識的に考えにくい名前」よりも広い意味で「当て字などを使った変わった名前」と定義されるようになったことを示唆している。しかし、そうした意味の広がりや変化がなぜ生じたのかやどのように生じたのかといった説明はされていない。

<sup>(5)</sup> 現代用語の基礎知識では、『キラキラネーム』という言葉は、そういうことに対する批判的なネーミング」と説明されており、こうしたネーミングをすることを『親バカ』と批判』していると認識している。一方で、これらの説明の直後に、「もちろん、こういったネーミングを『親バカ』と批判するのは『余計なお世話だ』という反論もある」と、括弧内ではあるが、説明が補足されている。これらの説明を総合すると、明確ではないものの、全体としてやや否定的な方向で評価をしているように見える。

#### 引用文献

- 自由国民社 (2012). 現代用語の基礎知識 2013. 自由国民社.
- 自由国民社 (2023). 「現代用語の基礎知識」選 ユーキャン新語・流行語大賞 第29回2012年授賞語. <https://www.jiyu.co.jp/singo/index.php?eid=00029>.
- 小林康正 (2009). 名づけの世相史「個性的な名前」をフィールドワーク. 風響社.
- 荻原祐二 (2015). 近年の日本における個性的な名前の特徴とその類型. 人間環境学研究, Vol. 13, No. 2, 177-183.
- 荻原祐二 (2022a). キラキラネームの定義とその構成要素. 人間環境学研究, Vol. 20, No. 2, 71-79.
- 荻原祐二 (2022b). キラキラネームは本当に増加しているのか?. 人間環境学研究, Vol. 20, No. 2, 129-133.
- 荻原祐二 (2022c). 名前を正しく読むことはなぜ難しいのか. 人文×社会, Vol. 2, No. 8, 1-7.
- 荻原祐二 (2023). 「キラキラネーム」の表記とその使用頻度—新聞と学術文献の分析—. 人間環境学研究, Vol. 21, No. 1. (印刷中)
- Ogihara, Y. (2020). Unique names in China: Insights from research in Japan—Commentary: Increasing need for uniqueness in contemporary China: Empirical evidence. *Frontiers in Psychology*, Vol. 11, 2136.
- Ogihara, Y. (2021a). Direct evidence of the increase in unique names in Japan: The rise of individualism. *Current Research in Behavioral Sciences*, Vol. 2, 100056.
- Ogihara, Y. (2021b). How to read uncommon names in present-day Japan: A guide for non-native Japanese speakers. *Frontiers in Communication*, Vol. 6, 631907.
- Ogihara, Y. (2021c). I know the name well, but cannot read it correctly: Difficulties in reading recent Japanese names. *Humanities and Social Sciences Communications*, 8, 151.
- Ogihara, Y. (2022a). Common names decreased in Japan: Further evidence of an increase in individualism. *Experimental Results*, Vol. 3, e5.
- Ogihara, Y. (2022b). Further explanations for difficulties in read-

ing recent Japanese names correctly. *Frontiers in Education*, Vol. 6, 799119.

- Ogihara, Y., Fujita, H., Tominaga, H., Ishigaki, S., Kashimoto, T., Takahashi, A., Toyohara, K., and Uchida, Y. (2015). Are common names becoming less common?: The rise in uniqueness and individualism in Japan. *Frontiers in Psychology*, Vol. 6, 1490.
- Ogihara, Y. and Ito, A. (2022). Unique names increased in Japan over 40 years: Baby names published in municipality newsletters show a rise in individualism, 1979-2018. *Current Research in Ecological and Social Psychology*, Vol. 3, 100046.
- ウンサーシュツツ・ジャンカーラ (2015). 「キラキラネームといわないで！」—新しい名前に対する評価とその現象に取り巻く言説—. 立正大学心理学研究所紀要, Vol. 13, 35-48

(受稿：2023年3月12日 受理：2023年3月24日)